

"非日常の場"に身を置き

マリン体験ではボディボードなどを満喫

島を挙げての入島式

長や地元の人と交流を行

吉岐島には博多港からジェットフォイルを使い、60分ほどで到着するが、シートベルト着用義務があることもあり風景はあまり楽しめない。だがその分、船を降りた時に目の前に広がる海と空の書の濃さ、照り付ける日差し、の強さの衝撃は強く、生徒たちに離島という「非日常な世界」に來たことを理解させるのには十分だった。「歓迎 守口市立窪津中学校」の横

その後、クラスごとに分かれて旅館に宿泊するため移動。簡単に昼食をとった後、夕方までたっぷりとマリンスポーツ体験を行った。同体験では、参加者がバナナボート、ウインドサーフィン、シユノケリングなど6種

集合写真

紙テープ投げで島に別れを告げた

取ること、生徒たちもびっくり取り組むことができた、結果としていい選択だった」と竹田校長。

班ごとに新鮮なウニや地魚を盛り込んだ船盛りが用意されるような、これまで非日常感あふれる夕食の後には、クラスごとにレクリエーションをしたり、満天の星を眺めた夜を楽しんだ。

旅館では、旅館の調理場を手伝うおはさんたちと生徒らが楽しく話す姿も見られた。「島で会う全ての人からあふれる『生徒に楽しんでほしい』『家族のように温かく迎えてよ』という気持ち」

事後学習でまとめた作文では、生徒の多くが岩岐島での研修に好意的な意見を書いた。生徒へのアンケートでも、最も印象に残った研修がマリンスポーツ体験、次いでクラスレクリエーションで、岩岐島での1泊がいか充実したものであったかが見て取れる結果だった。

今回の旅行は、3年生209人が1人も欠けることなく全員が参加した。不登校の生徒も増える今、全生徒が一緒に行動する修学旅行はあり方が問われる時代だが、竹田校長は「全員が参加できることは、3年間を通して学年教師団、生徒の

いのはなかなか話す機会はない」と話す。竹田校長は農家民泊黎明期に長野・飯田での農家体験を取り入れるなど、教師旅から常に新しい修学旅を模索。「普段体験を通してさまざまなことを五感で感じ取らせるのは、修学旅行だからできること。その妨げに行先にはないものは何となくを追求することは重要な」と力を込める。

こういった観点からも、岩岐島では竹田校長が今まで参加した修学旅行の中でも、1、2を争ふ充実した旅だったと評価。「もっと多くの学校に岩岐島での修学旅行を体験してほしい」と語った。

TEL 0241-62-2250 <http://www.minamiaizu.co.jp/>

www.iseshima-kanko.jp/business/gakuyu/

www.iseshima-kanko.jp/business/gakuyu/